

厳しい状況にあってもこそ 頑張っている人を応援したい

創業者の献身的な働きぶり

当社は来年(2016年)3月をもって、創業70周年を迎えます。創業者の梶本秀尾は旧鉄道省の電気技師で、大阪鉄道局長から賞詞を受けるほど、戦災復興に尽力した人でした。終戦翌年の1946年に独立。大阪で電気工事会社を興したのですが、当初は仕事がなく、泉州などから仕入れた食糧を売って生計を立てていました。一方、空襲で壊滅状態にあった大阪市電を目の当たりにし、鉄道省時代に培った技術で、その復旧に貢献したいと考えたのです。そこで大阪市交通局を訪ねたところ、驚いたことにその局長はかつての鉄道省の大阪鉄道局長でした。局長は梶本の献身的な働きぶりをよく覚えてくれていて、梶本を電気部長に紹介してくれました。復興への社会貢献活動が、新たな仕事につながったのです。

市電の復旧に携わるようになった当社は、あらためて技術力

の高さが認められ、その後、市営地下鉄や在阪私鉄の電気工事も行うようになりました。さらに、地下鉄のサードレール(車両への給電用レール)の施工実績が認められ、東京オリンピックの1964年に開業した日本初の東京モノレール(浜松町ー羽田空港間)から直近の沖縄まで全国のモノレール剛体電車線工事に携わってきました。また、金沢シーサイドラインやポートライナー(大阪南港、神戸)など、全国の都市型新交通システムも受注してきました。同時に東海道新幹線から今年3月に開業した北陸新幹線まで、全国の新幹線工事も施工して参りました。しかしこうした鉄道関係の仕事は全体の仕事の2割程度で、あとは都市化に伴う大型ビルなどの電設工事を請け負っています。

このように、当社の発展は、頑張って働いて社会に尽くしたいという、創業者の強い思いがきっかけでした。私も創業者と同じように、事業で得た利益で社会貢献できることをうれしく思っています。近年は、太陽光発電システムをはじめ、2013年には大分県別府市の企業など4社と共同出資して西日本地熱発電株式会社を設立し、昨年、同市で「五湯苑(ごとうえん)地熱発電所」を建設、稼働させました。まだ緒に就いたばかりですが、これを機に自然エネルギー発電の需要を掘り起こし、皆さまの暮らしのお役に立つことができると考えています。

事業利益で社会貢献を果たす

社会貢献活動を行うにあたっては、「ご縁」も大事にしています。WHO(世界保健機関)への寄付支援は、社団法人日本WHO協会への關淳一理事長(元大阪市長)が私と大阪市立大学医学部の同級生(岩橋氏は文学部へ転部)で、彼からWHOへの支援を頼まれたのがきっかけで法人正会員になりました。また、アジア諸国の孤児や母子・難民などの福祉や教育を支援する公益財団法人アジア福祉教育財団への支援は、同財団の奥野誠亮名誉会長(元文部大臣)が私と同郷(奈良県御所市)で、若い頃からのご縁がきっかけです。そして、当社のお客様でもあるロート製薬様が提唱された「みちのく未来基金」は、東日本大震災の震災遺児が大学を



卒業するまで、25年間にわたって教育支援をするという長期的な活動に共感して微力ながら寄付を続けております。その他、テレビなどで報じられる紛争の画面を見ているとあまりにもひどい悲惨さにせめて、少しでも思い「国境なき医師団」やユニセフなどにも寄付させていただいております。文化関連では、「アーツサポート関西」などに支援活動を行っています。

こうした寄付支援は当社が事業利益を上げているからこそできるものです。当社は創業以来ずっと黒字経営を続けており、昭和45年から大阪国税局より優良法人の表彰をずっと受け続けています。こうした納税義務を果たすことも、社会貢献のひとつだと自負しています。着実に利益を上げ、支援活動を続けることは決して簡単ではありませんが、私は「貧者の一灯」の精神で続けていきたいと思っています。

自助努力をしてこそその繁栄

鉄道の保守工事はほとんどが夜業ですので、工事担当者は昼夜逆転の生活を強いられます。冬は寒風吹きすさぶ高架で作業したり、夏はまったく日陰のない軌道上で暑さと闘っています。危険な場所での作業ですから、細心の注意も欠かせません。緊急連絡が入れば、深夜でも現場に急行します。そうして翌朝の始発までに工事を済ませなければなりません。安定した運行の維持に使命感を持っています。

また、ビルの新築工事では、電設工事が完了して配電盤のスイッチを入れると、建物に生命が吹き込まれたように全館の照明が一斉に点灯します。現場で苦労を重ねてきた者が、最高の達成感を得る瞬間です。私は、若い人たちにはこうした達成感を味わってほしいと思っていますし、誠実に努力し、良い成果を出すことでお得意先から「次の現場も君にやってほしい」と言ってもらいたいのです。そのためには、技術力に加え、コミュニケーション能力や人柄を磨く努力が必要です。これは文化活動に携わる人にもあてはまるでしょう。一生懸命努力している人を見ると、応援したい気持ちになります。大阪市が文楽への補助金をカットしたとき、若い芸員の方々、観客を増やそうと駅前



北陸新幹線(2015年3月開業)架線とそれを支える柱をすべて請け負う



五湯苑地熱発電所(大分県別府市)

文楽の面白さをアピールされたことがありました。芸術や文化活動を続けていくのは大変なご苦労があると思いますが、補助金頼みだけではいけません。大きな企業や金融機関は社会的影響が大きいので公的な支援もありますが、われわれ中堅・中小企業は誰も助けてくれません。経営も文化も自助努力しかないというのが、私の考えです。

山登りも日本の文化

還暦を迎えてから2年間、能楽師の山本章弘氏に師事して謡曲を学びました。クラシックも大好きです。また、60歳を過ぎた頃に黒部アルペンルートに旅したことがありました。そこで立山連峰の雄大な景色を眼前にした私は、大切なものを忘れていたことに気がつきました。じつは私は学生時代に山岳部に所属していました。大好きだった山に再び戻ろうと決意したのです。それから20年間、毎年、剣岳や立山連峰などの北アルプスを中心に登っています。トレーニングのため毎週金剛山(標高1125m)に出かけ、今年で24年目、通算1369回(2015年7月26日現在)になりました。六甲全山縦走(全長56km)は61歳からはじめ、77歳まで16年間連続完走しました。上り下りの連続で、13時間から70代後半になってからは17時間もかかる精神的にも辛く厳しい縦走です。

日本には山岳思想があります。山に登ると、自然の中で精神が浄化されるような気持ちになります。季節の移ろいや山野草などを眺めつつ、自分を見つめる機会にもなっています。若い頃に読んだ徳富蘆花の「自然と人生」や夏目漱石の「草枕」の一節を振り返って、人生のあり方を考えることもあります。ですから、私にとって山は歩きながら考える哲学の場なのです。山のなかで他人と出会うと、どちらからともなく挨拶をしたり、道を譲ったりしますね。古来、日本人が大切にしてきた「しづさ」には、他人を思いやる所作や奥ゆかしさが込められています。現代は、こうしたしづさが忘れられているような気がしてなりません。若い人もこうした日本文化や道徳観をもっと大切にしてほしいと思います。

岩橋貞雄氏

1935年奈良県御所市出身。1961年大阪市立大学文学部卒業後、明星学園(大阪市)で教鞭をとる。1965年同学園を退職、八千代電設工業株式会社入社。1985年同社代表取締役就任、現在にいたる。一般社団法人鉄道電気安全協会理事、東優会理事、一般社団法人日本建築協会理事、公益社団法人東納税協会副会長。

八千代電設工業株式会社

大阪本社:大阪市中央区森ノ宮中央1丁目1番38号
1946年創業。鉄道・地下鉄およびオフィスビル・医療施設などの屋内外電気設備施工を中心に、光ケーブル通信などの情報通信網施工、太陽光発電、地熱発電など、幅広い電気設備施工を展開。資本金1億2000万円、売上高123億円、従業員数183名(2015年5月期)。



北アルプス「剣岳(標高2999m)」にて(2014年8月)

写真提供: 八千代電設工業株式会社